

143 大動脈炎症候群における肺血流・換気シンチグラフィ

近畿大学医学部放射線科

○榎林 勇、浜田辰己、石田 修、坂下太郎
大阪成人病センター放射線科

梶田明義

神戸大学医学部放射線科

桂 武生、西山章次

目的：大動脈炎症候群の肺動脈病変を肺血流・換気シンチグラフィにより検索する。

方法：大動脈造影をふくむ諸検査により、大動脈炎症候群と診断し得た4症例を対象として、肺血流・換気シンチグラフィを行なった。被検者を座位とし、 ^{81m}Kr 、 ^{133}Xe の静注法および吸入法により、前面と背面の肺血流・換気イメージを得た。それらを胸部X線像と対比すると共に、 ^{81m}Kr 、 ^{133}Xe のPerfusion Imageで肺血流分布異常のある場合は、 ^{99m}Tc -MAAによる肺シンチグラフィならびに肺血管造影を行ない、比較検討した。

結果：肺血流イメージでは4例中2例の50%に肺血流分布異常を認め、肺血管造影により、該当肺野に対応する肺動脈主幹部の閉塞・狭窄が確認された。胸部X線像上、肺血流分布低下肺野領域にも、X線透過性の増加はなく、肺換気イメージでは肺血流分布異常の有無にかかわらず全例ともに正常像を示した。

考按ならびに結語：気管支喘息等閉塞性肺疾患では、胸部X線像上明らかな変化を見出せなくても、肺シンチグラム上肺血流分布の減少ないし欠損を示すことが多く、大動脈炎症候群による肺動脈病変を肺血流スキュンのみからは速断出来ない。今回われわれは、最近経験した大動脈炎症候群4症例の肺血流・換気シンチグラムを供覧し、肺動脈血流低下部位における気管支動脈血流の関与等その検査意義について若干の考察を試みた。

144 心室中隔欠損症の肺シンチグラム

信州大学 放射線科

○中西文子 春日敏夫 坂本良雄
小林敏雄

第二外科

志田寛 藤田ひろ子

中央放射線部

矢野今朝人

心室中隔欠損症の肺血流シンチグラムにおいて、胸部X線像や心血管造影ではとらえられない異常所見が観察される症例があつた。心室中隔欠損症の1. 特徴ある肺血流分布異常のパターン、2. 異常所見と肺血行動態との関係、3. 病期及び手術による予後と肺血流異常との関係を知ることを目的とした。

昭和49年1月から53年3月まで手術の目的で入院し、肺血流スキュンを施行したのは40例であつた。このうちデーターのそろっている23例を対象とした。

テクネシウムMAAを背臥位で静注し、前、後、両側面像をシンチカメラで撮影した。同時に、前、後面像をコンピュータの磁気テープに収録した。これを、 32×32 のマトリックスイメージに変換後、左右各行の計数値を0から100までの数字で表示し、これより上下比及び左右比を計算した。

シンチカメラ像を観察し、上下比、左右比の値と、肺動脈圧(P_p/P_s)、X線像などとの比較を行なつた。また11例については術前及び術後の比較をも行なつた。

肺シンチグラム上の異常所見としては、左肺の血流減少(左右比の減少)、下肺野の血流増加(上下比の減少)、両肺門部欠損、両肺野不均等な分布像などであつた。このうち、左肺の血流減少が高い頻度でみとめられた。

肺高血圧症との関係では P_p/P_s が大きいもの程、肺血流分布異常を示す頻度が大であつた。手術後、これら肺シンチグラムの異常所見は改善するものが多かつた。